

2025年10月26日 第二礼拝 スチュワードシップ「祈り」

説教題『主の愛と恵みの「中に」』フィリピ4章6〜7節

主任牧師 加藤 誠

「どんなことでも思い煩うのはやめなさい。何事につけ感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。」(フィリピの信徒への手紙4:6〜7)

言葉は、それを語る人によってまったく違う響きを帯びます。例えば、今朝の6節「どんなことでも思い煩うのはやめなさい」。この言葉をお金持ちで何不自由することのない人が語っても鼻で笑われるだけでしょう。けれども牢獄で鎖につながれているパウロがこの言葉を語る時、それは大きな驚きとなります。「パウロさん、どうしてこんな言葉を語れるのですか?」。このフィリピの信徒への手紙は使徒パウロがエフェソで牢獄に捕らわれていた時に書かれた手紙です。鞭で打たれた傷が痛み、足は鎖でつながれ、いつ処刑されるかわからない。恐れと不安にかられても仕方ない状況下で書かれた手紙でありながら、この手紙には不思議な喜びが満ちています。パウロは語ります。「わたしが牢獄に捕らわれたことで、かえって多くの人がイエス・キリストを知るようになり、主に結ばれた兄弟たちが恐れることなくますます勇敢に御言葉を語るようになった!なんと大きな喜びだろうか!」(1:12以下)と。「牢獄の中で、わたしは満腹している時も空腹の時も、物が有り余っていても不足していても、いついかなる場合にも対処する秘訣を学んだ。わたしを強めてくださる方によって、わたしにはすべてが可能なのだ!」(4:12以下)と。牢獄の中でパウロは一人ではない。パウロを強め、励まし、喜びを届けてくださる方と一緒に歩んでいるのです。

私たちの多くは、状況が好転すると「幸いだ!」と喜び、状況が悪化すると落胆して下を向きます。周りの状況次第の「幸い」です。それに対してパウロは、どんな状況においても私たちと共にいて、私たちを強め、慰め、支え、導いてくださる方からいただく「幸い」を生きています。この「幸い」は状況に左右されません。信仰とは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐこと。すぐ移り変わるものではなく、いつまでも変わらないものに目を注ぐこと。十字架と復活のキリストは、この世界がどんな深い暗闇に覆われているときにも変わらない、消えることのない、神の命と希望を見せてくださいました。このキリストの愛と恵みに目を注ぎ、この愛と恵みの中に生かされる時、たとえそこが牢獄の中であっても、私たちは喜びと幸いを見出して歩むことができる。これがパウロの力強い証しです。

教会に初めて来られた方が戸惑い、違和感を覚えるのは、「祈り」ではないでしょうか。目に見えない、どこにいるか分からない「神」なるものに向かって語りかける。祈りは不思議な行為です。しかし、イエス・キリストと出会った人たちは「祈り」がむなしく空中に消えていく独り言ではないことを知っています。なぜなら主イエスご自身

が「祈り」を生きられたからです。「祈り」を通して天の父なる神と一つとなって私たちの間を生きられた。主イエスの足跡には、神の恵みと愛と励ましと希望があふれているのを見た人たちは、「祈り」がむなしい独り言ではなく、神とともに歩む恵みであることを確信しました。そして、主イエスに従いたいと思う者たちが「祈り」を通して主の愛と恵みの中に歩むとき、私たちの足跡にも、神の恵みと愛と励ましと希望が刻まれていくことを体験していったのです。

今朝と一緒に読んだフィリピ 4 章にはその「祈り」についての大切な勧めが記されています。フィリピの教会の人たちは福音宣教の働きをよく担っていましたが、どうやらメンバー同士の間ですれ違いがぶつかり合いが起こっていたようです。教会はいわゆる「気の合う仲間が集まった仲良しグループ」ではありません。集められたのは主なる神さま。ふつうなら「仲良くできないお互い」が一緒に「主にあって共に祈る」ように招かれている交わり、それが教会です。ですから人間的にぶつかり合うことが起こるのは当然といえば当然のことなのです。

パウロはこの4章で「主にあって固く立ち」「主にあって同じことを思い」「主において喜びなさい」と三度「主にあって」という言葉を重ねています。英語では“in Lord” “in Christ”、つまり主、キリストの「中に身を置いて」ということです。「教会、いろいろあるよね。一生懸命にキリストを伝えたいと思うからこそ、ぶつかることがある。そのときに「主にあって」を忘れるな」と言うのです。バプテスマはキリストの死に沈められ、命に生かされること。祈りは「私たちを包むキリストの愛と恵みの中にすっぽり自分を置いて、キリストの命に生かされること」。自分の意志ではなく「主にあって」招かれ、自分の思いを超えて「主にあって」組み合わせられ、わたしの喜びではなく「主にある」喜びを分かち合っていく。自分の思い、感情ではなく「イエス・キリストの中に」固く立つ。主の思いを受け、主の喜びをいただいてく時、同じ主の愛と恵みの中に招かれている「友」が見えてくるということでしょう。

誰もがまず自分のことを祈ります。今日主から信仰をいただけるように。家族や友人が主の恵みに守られて歩めるようにと。しかし「スチュワードシップ」を考えると、私たちは自分の祈りだけでなく、教会の祈りを共に祈るように招かれていることを覚えたいのです。「スチュワード＝神の賜物の善き管理者」としての「祈り」。「祈り」は神から託された恵みの賜物です。土の中に埋めてしまうのではなく、しっかり使い切るように、一人ひとりに託された恵みの賜物です。恵みの賜物としての祈り、教会の祈りを共にささげていきましょう。例えば、教育館建築は「誰かがやってくれる、祈ってくれている」では教会の働きになりません。目の前の大きな山だけを見るのではなく、主の愛と恵みに目を注ぐなら大きな山は動き、海に飛び込む。この祈りを教えてくださった主を信頼して共に教会の祈りをささげていきましょう。